



Title	スペイン語第3活用不規則動詞に生起するメタフォニーに関する歴史的考察
Author(s)	伊藤, 太吾
Citation	大阪外国語大学学報. 1977, 39, p. 235-252
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80672
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

スペイン語第3活用不規則動詞に生起する メタフォニーに関する歴史的考察

伊 藤 太 吾

A HISTORICAL STUDY IN THE METAPHONY OF SPANISH THIRD IRREGULAR VERBS

Taigo ITO

There is a controversial problem about the Metaphony of Spanish Third Irregular Verbs. The Metaphony means this time an alternation of stem vowel-e- with -i- in a stressed position. Most of the beginners wonder why this excentric sound alternation occurs in -IR Verbs. According to James W. Harris, many years ago Ramón Menéndez Pidal explained this phenomenon as caused by “yod”. Recently Harris has reached a conclusion that “third conjugation metaphony” — forged by himself — bears the reason. I criticized his “third conjugation metaphony” and I have arrived at a conclusion that such an abstract “third conjugation metaphony” never exists and that “yod” is the principal cause for the sound alternation $e \rightarrow i$ of Spanish Third Irregular Verbs.

スペイン語不規則動詞の語根母音化は複雑で、暗記するのに苦労した記憶がある。不定詞の語尾が -ir である、いわゆる第3活用語動詞といわれるものが特に悪名高い。語根母音が -o- の dormir と語根母音が -e- の sentir を例にとると、直説法現在で語根母音にアクセントのある人称では duermo siento の様に二重母音化し、アクセントのない人称では dormimos sentimos の様に元のままであり、同じ現在時制でも接続法になると、上記に対応する人称の活用は、duerma durmamos; sienta sintamos となるという風に、-o- が場合によっては -ue -- o -- u- となり、-e- が -ie -- e -- i- となるという現象が初学者にとって実に不可解な存在なのである。そこで本稿では、どのような条件下でこのような語根母音の変化（これをメタフォニーと呼ぶ）が起きるかという事を歴史的に明らかにしてみたい。-o- や -e- がそれぞれ -ue -ie- となる現象は一般には二重母化と言われているし、-o -- e- がヨッドやワウの影響でそれぞれ -u -- i-

となる現象が一般にはメタフォニーと言われる最近の傾向であるが、私は本論ではその一般的傾向に従う事にする。

そのメタフォニーの例を少しあげてみると次の様なものがある。まず、後続音節のヨッドに影響されるとほぼ定説になっている例として、*sentir* を例にとると、*sintió, sintiera, sintiese, sintiendo* などの種々の活用形に現われるが、これらのヨッドは全てラテン語の時から存在していたものではなく、ロマンス語になってから新たに生成したものである事が注目に価する。又、*dormir* の場合を見ると、*durmió, durmiera, durmiese, durmiendo* となり、*sentir* の時と同じ活用において語根母音が1段階狭まっているのが判る。これもラテン語のヨッドによるものではなく、2次的・派生的ヨッドに由来している。それでは、2次的ヨッドが後続する場合 -o--e-

が常に -u--i- になるのかと言うと、実はそうではない。例えば、*poner* の不定過去1人称単数 *puse* に相当するラテン語は *POSUI* で、ワウに影響されて -O->-u- となったりするのは1次的影響の例であり、3人称複数 *pusieron* の場合は明らかに2次的な例である。つまり、1次的にも2次的にも -O->-u- が起る可能性があるのに、ヘルンディオでは *poniendo* で -o- のままであり、一方では、不定過去が *pude...pudieron* と活用する *poder* に由来する動詞的形容詞 *puiente* やヘルンディオ *pudiendo* には2次的原因による -u- が見られたりするので、ヨッドとワウは極めて複雑な様相を呈す原因であるという事になる。そして、実際にはワウよりもヨッドの方が数量的には大きな影響を与えている。その上、1次的・本来的ヨッド即ちラテン語のヨッドに起因するメタフォニーも又上述の如くスペイン語に皆無でなく確かに存在するから、尚更問題はややこしい。名詞の例としては、*SEPIA* > *jibia*, *VINDĒMIA* > *vendimia* などが直に思いつく。動詞の例としては、私に一番興味ある *TENEO* > *tengo*, *VENIO* > *vengo* などがある。(その -go の例は、一般にヨッドと無関係の様に思われているが、非常に関係のある事が後段で分る。) この様に、1次的なヨッドであれ2次的なヨッドであれ、先行する中・高前・後母音を1段階狭める役割をしているわけで、相当に長い世紀にわたってメタフォニー現象が起り続けた事を想像せしめる。又、一方において、矛盾する様でもあるが、上記の *poniendo* に例を見る様に、2次的ヨッドが全く -O->-u- に関与しない場合もあるので、その理由・時代も当然疑問となってくるのであるが、問題の所在を明確にする為に、本稿では主として現代語の第3活用不規則動詞の直説法及び接続法現在形のメタフォニーの原理についてのみ考察する事にする。

さて、Hugh E. Wilkinson は *Vowel Alternation in the Spanish-IR Verbs* (1977, Tokyo) で、次に挙げる11項目の第3活用動詞にメタフォニーが現われると言っている。そして、現われるメタフォニーの形を記しているので、そのままここに紹介しよう。

- (1) *e/ie/i*; Latin E, AE: *ferir, mentir, sentir, (a) rrepentirse, fervir, premir, tremir, -cernir, convertir, erguir, re-querir (pes-, con-) venir, aterirse, and compounds.*
- (2) *e/i*, OSp. also *e/ie/i*; *vestir, embestir, servir, seguir, rendir, pedir, e.x-pedir (des-) gemir,*

- Latin E: *regir* and compounds.
- (3) *e/i* or *i/i*; Latin E, I: *medir* (co-), *re-cebir* (con-, (a)per-, (a)per-, de- (F.J)), *descir*, *fenchir*, *redemir*, *cenir*, *costrenir*, *estrenir*, *tenir*, *fenir*, *renir*.
- (4) *e/i* or *i/i*; Latin I: *bevir*, *escrevir*, *reir*, *freir*, *dezir*.
- (5) *e/i*; etyma doubtful: *arrecirse*, *derretir*, *engreirse*, *desleir*.
- (6) *e/e/i*; Latin E: *exir*.
- (7) *o/ue/u*; Latin O: *dormir*, *morir* and compounds.
- (8) *u/u*, or OSp. *o/u*, also *o/ue/u*; Latin O: *cobrir*, *ofrir*, *aborrir*, *nozir*, *complir*, *contir*, *escorrir*; and MSp. *tullir*, *tundir*, *surtir* (1), *munir*, *curtir*?, *mullier*, *cundir*, *pulir*, dial. *espurir*, *cullir*.
- (9) *u/u*, or OSp. *o/u*: *sa-codir* (a-, re-), *sobir*, *sofrir*, *foir*, *roir*, *destruir*, *escopir*, dial. *tusir* and *cusir*, *bullir*, *engullir*, *grunir*, *surtir* (2), *ordir*, *englotir*, *modrir*, *podrir*, *surgir*, *unzir*, dial. *mocir*, MSp. *confundir*.
- (10) *u/u*, OSp. also *o/u*: *aduzir*, *sumir*, *luzir*, *mugir*, dial. *pruir*.
- Latin U:
- (11) *o/o*, OSp. also *o/o/u*: *oir*.

Latin AU:

上記のうちうち(6)までが語根母音が前母音で、(7)以降が後母音の例である。その様なわけで、私は語根母音が前母音である動詞をまずはじめにとりあげる事にする。(1)から(6)は、語根母音が現代カスティリア語で二重母音化するか否かにより分類できる。すると二重母音化するのは(1)であり、(2)から(6)までは単母音のまま、メタフォニーを起こしている。

Wilkinson が(1)に入っている動詞を、Real Academia Española, Esbozo de una Nueva Gramática de la Lengua Española (1973, Madrid)により補足しようとしても *digerir* だけである。*digerir* の語源は DIGĒRERE であるから、語根母音のメタフォニーが -e -/- ie -/- i である第3活用の動詞は全て語根母音が Ē 又は AE という事になる。又、-Ē- がアクセントのある位置で -ie- となるのはスペイン語の規則的変化であるから、この意味では不規則動詞とは言えない事も分る。(この様な所から、不規則動詞には規則性があると言えるのである。)今述べた E>ie の変化は、R. Menéndez Pidal, Orígenes del Español (1968, Madrid) によれば、9世紀初頭にカスティリアの初めの文献があるというが、私も Ē>ie の変化は9・10世紀が最盛期であったと考える。しかし、それ以降に民衆語 (= popularismo. 教養語 = cultismo に対立する) として採用された単語全てにおいても同じ変化が起こるかという疑問が湧いてくる。そこで、上記の Wilkinson の挙げている動詞及び Academia の挙げている *digerir* の初出年代を Martín Alonso, Enciclopedia del Idioma (1968, Madrid) について調べてみると、次の様になる。

aterirse	XIV	arrepentirse	XIII
convertir	XV	discernir	XV
digerir	XVI	erguir	XIII
fervir	XIV	herir	XIV

mentir XII
requerir XIII
sentir XII

premir XIII
tremir XVI
venir XII

(ローマ数字が初出の世紀を示す。)

この一覧表で判る通り、初出年代は12世紀から16世紀にまで及んでいる。参照した Martín Alonso の *Enciclopedia* が文芸作品を中心に引用しているところからすれば、初出年代が12世紀となっていたても、9世紀頃から中断していた為では決してないと考えられる。又、初出年代が比較的小さい16世紀というのは、一体何を物語るのであろうか。当時の文語としてのラテン語に長短・開閉の区別があったとは思われないし、その様な意識を一般人が有すはずがないし、学者の強制によるものでもなかろう。これは、 $\tilde{E} > ie$ の音韻変化が、9世紀からの伝純として、類推力が強く働いた事もあって、すっかり民衆語に定着した事を示すものである。当然、他の全ての品詞にも同様に起っている変化であり、それ故に尚更堅固な規則的な変化となったのである。それが更に発展して $\tilde{E}$ - のみならず $\tilde{E}$ - をも $-ie$ - にしているのである。今見て来た(1)の語根母音 $-E-$

が $-ie$ - となるのは、そこにアクセントのある場合で、直説法現在1・2人称複数の様にアクセントのない時は $-e$ - となるという事は既に述べた。更に、 $-E-$ が $-i$ - となるのは、直説法不定過去3人称複数の様に語根にアクセントがなく、2次的ヨッドを含むアクセントのある音節が後続する場合であるという事も述べた。これだけで終るのであれば極めて簡単なのであるが、語根母音が上の場合と同様に $\tilde{E}$ - であり乍らアクセントのある音節で今度は $-ie$ - でなく $-i$ - になる狭義のメタフォニーが生起するグループが(2)であり、更に又同じ現象は語根母音が $\tilde{E}$ - の時も $\tilde{I}$ - の時(3)も生起するし、 $\tilde{I}$ - の時(4)にも見られる現象だから、極めてやっかいなのである。

これらの狭義のメタフォニーに関し、James・W. Harris の注目に価する論文が *Diachronic Studies in Romance Linguistics* (1975, Mouton——拝借した関西外国語大学講師宮本雅美氏に厚く礼を申したい。)に収録されている。Harris は *medir* を俗ラテン語にまでさかのぼって、現代語との間をうめようとしている。以下に Harris の *Diphthongization, monophthongization, metaphony revisited* の要約をしてみよう。(明らかな誤植は私の責任で訂正した。)

(イ)	Present indicative	Present subjunctive
	<i>mētio mētīmus</i>	<i>mētīa(m) mētīāmus</i>
	<i>mētīs mētītis</i>	<i>mētīās mētīātis</i>
	<i>mētīt mētēt/-unt</i>	<i>mētīat mētīant</i>

これが考えられる俗ラテン語の形である (と言うが、勿論私にも異論のあるはずがない。(1)の形態がイベリア半島では早い時期に(2)の如く変化したと言う。

(ロ)	<i>mido medimos</i>	<i>mida midamos</i>
	<i>medes medides</i>	<i>midas midades</i>
	<i>mede meden</i>	<i>mida midan</i>

この段階で(イ)と異なる点は、直説法 1 人称単数と接続法の全人称の母音 *e* が *i* に変り Ramón Menéndez Pidal がヨッドと呼んだ口蓋摩擦音が消滅している事である。この(イ)から(ロ)への移行を Phonetic Metaphony と呼び、図式化すれば次の様になる。

(ハ) *Phonetic Metaphony*

$$\left\{ \begin{array}{l} \bar{e}, \bar{o} \\ \bar{e}, \bar{o} \end{array} \right\} \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \bar{i}, \bar{u} \\ \bar{e}, \bar{o} \end{array} \right\} / \text{ Coy (y} \rightarrow \bar{i}, \bar{e} \text{ adjacent to another vowel)}$$

この(ハ)で理解できる現象が(イ)から(ロ)の段階で生起するのであるが、その途中の過程をもう少し詳しく説明すると、(ニ)の如くなる。

(ニ) Subjunctive

Indicative

mētia *mētīāmus*
↓ ↓
mētya *mētyāmus*
↓ ↓
mitya *mityamus*
mida *midamos*

mētiō *mētīs* *mētīmus*
↓ ⋮ ⋮
mētyō ⋮
↓ ⋮
mityo ⋮
mīdo *mēdes* *mēdimos*

Loss of syllabicity

Phonetic Metaphony (ハ)

Other changes

この説明が伝統的なもので一番もっともらしく思えるのであるが、この図式で全ての場合を説明できるとは限らず、いまだ不満は残る。そこで(イ)に示した一般的な Phonetic metaphony と特に第 3 活用独特のメタフォニーとを区別して(ホ)に示すと、次の様になる。

(ホ)

a. *Latin*

First conjugation indicative

Third conjugation subjunctive

mōlliō *mōlliāmus*
mōllās *mōlliātis*
mōlliat *mōlliant*

mōlliā(m) *mōlliāmus*
mōlliās *mōlliātis*
mōlliat *mōlliant*

b. *Spanish*

mojo *mojamos*
mojas *mojáis*
moja *mojan*

mulla *mullamos*
mullas *mulláis*
mulla *mullan*

上のラテン語を見てみると、直説法の場合も接続法の場合も 1 人称単数の語尾が少し異るだけで、これを除けば全ての人称にわたり直説法と接続法とは完全な対応を成している事が一目瞭然である。ところが、それぞれに対応するスペイン語を見ると、直説法と接続法では語幹が一貫して異っている事に驚かされる。その異なる理由は音声的なものでも音素的なものでもなく、むしろ(ハ)に示される様な形態的構造における聴きとり難い抽象的な差異によるのである。

(へ)		Stem	Theme vowel	Subjunctive marker	Personal ending
	1st conj. <i>mojas</i>	< mōlli	ā		s
	3rd conj. <i>mullas</i>	< mōll	ī	ā	s
	1st conj. <i>mojamos</i>	< mōll	ā		mus
	3rd conj. <i>mullamos</i>	< mōll	ī	ā	mus

第1活用動詞の場合、ヨッドは語幹に属しているが、第3活用動詞の場合、ヨッドは幹母音の $\bar{I}$ に由来している。その様なわけで、疑問の余地のない第1活用動詞の展開式は(ト)の如くなる。

(ト)	mōlli + ā + ō	mōlli + ā + s	mōlli + ā + mus	
	mōlli ↓ ō	-	-	Theme V deletion (in env. + — + V)
	mōlly ō	mōlly ā s	mōlly ā mus	Loss of syllabicity
	mōlly ↓	mōlly ↓	mōlly ↓	Phonetic Metaphony (4)
	mo j	mo j	mo j	(1)ly > j
	mojo	mojas	mojamos	Other changes

この(ト)の図式で分る通り、mojar の派生過程は mullir の場合と基本的に次の2点において異なる。

(i) 幹母音削除は、ヨッドの源である幹末音 i に影響を与えない。

(ii) (へ)の Phonetic metaphony により $\bar{o} > \bar{ō}$ の変化が起り、その結果、アクセントのある時の $\bar{o}$ の規則変化である ue という二重母音にはならない。

さて今度は(ト)とは対照的に、第3活用の mulla, mullas, mullamos を示すと(チ)の如くなる。

(チ)	mōll + ī + ā	mōll + ī + ā + s	mōll + ī + ā + mus	Third Conjugation Metaphony
	mull ī ā	mull ī ā	mull ī ā	Theme V deletion (in env. + — + V)
	mull ↓ ā	mull ↓ ā	mull ↓ ā	Other changes
	mulla	mullas	mullamos	

ここでは幹母音の $\bar{o}$ が u になっている。この ≈ 1 段階上る現象は phonetic metaphony では説明できない。又、y の源となるはずの幹母音削除が早く行われるから ly も j には変らない。

以上の事から、第3活用のメタフォニーを握る鍵は正に第3活用の幹母音である抽象的のセグメント / $\bar{i}$ / であり、それに対応する音声的セグメント [y] ではないという事が判る。[y] は(ホ)で示した初期のラテン語の段階では他の源に由来する [y] と一致したが、その後の段階では全く

現われていないのである。

約言すれば、第3活用メタフォニーの規則は大まかに言えば(11)のようになるに違いない。

(リ) *Third Conjugation Metaphony*

$$\left\{ \begin{array}{l} \bar{e}, \bar{o} \\ \tilde{e}, \tilde{o} \end{array} \right\} \rightarrow [+high] / \text{--- Co } [+high] \text{ Verb Theme}$$

要約すると(1)で示した *Phonetic metaphony* の規則は、疑う余地なく、(2)で示した第3活用パラディグムの派生に適用される。*phonetic metaphony* の規則は確かに、第3活用規則に音韻的動機づけという最初の刺激を与えてはいる。第3活用メタフォニーが *phonetic metaphony* と異なる点は、前者が音声表示というよりもむしろ抽象的な何かに、つまり、一定の環境におけるいかなる前・高母音もではなく、正に第3活用動詞の幹母音をメタフォニーを誘発さす要因 (*metaphonic stimulus*) であると同定する事に依存している事である。

第3活用メタフォニーの結果として上に挙げた説明は、次の様な予期しない現象のお影で強い支持を得る事になる。即ち、実に驚く可き事実なのであるが、現代スペイン語の幹母音が *e* である第2活用の動詞には、語根母音として *i* も *u* も使われないという事である。(名詞には *mujer*, *elfiler*, *bachiller* etc. があるが、動詞でこの様な *i, u-er* の形をしたものは全然ない。) この様なわけで、第3活用動詞が「高活用」であるという意味合いにおいて、第2活用動詞は「中活用」であると言える。この第2活用の特性は、第3活用メタフォニーの一般化によって生じたスペイン語動詞に関する1つの制約 (*constraint*) と見ることができよう。その制約は概略(12)の通りである。

Stem-Theme Harmony

$$(12) \left[\begin{array}{c} V \\ -low \end{array} \right] \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} high \\ mid \end{array} \right\} / \text{--- Co } \left\{ \begin{array}{l} high \\ mid \end{array} \right\} \text{ Verb Theme}$$

制約(12)は興味ある結果をまねく。次の各対について少し考えてみよう。

	2nd conj.	3rd conj.
(ル)	<i>cūrrēre</i> <i>cōrrer</i>	<i>dis-, es-, in-, re-currir</i>
	<i>rūmpēre</i> <i>rōmper</i>	<i>inter-, pro-(r)rumpir</i>
	<i>mīttēre</i> <i>mēter</i>	<i>ad-, re-mitir</i>

第2活用の形は、いわゆる「俗語」の語彙に属するものである。即ち、中断する事なしに継承されている語彙の一部なのである。他方、第3活用の形態は「教養語」、つまりラテン語から比較的遅く借用した学者言語なのである。一般的に借用語はその語源に忠実である(少くとも、今私達が問題にしている事に関しては)事からして、又、スペイン語に借用語を導入した学者が元々ラテン語の第何活用に所属していたかを知っていたに違いない事からして、何故彼らが語源的により近い *-er-* 活用でなくて *-ir* 活用と結合せしめたのかと私達が疑問に思うのも尤もであろう。私が考えつく最も説得力のある答えは、借用語の導入者はスペイン語を母語とする人達であるので、彼

らは言語能力の一部として制約(×)を有していて、その結果語根母音が *u* と *i* の動詞は絶対に第2活用には入れないという事を暗々裡に知っていたという事になる。

以上が Harris のメタフォニーに関する意見である。一見理路整然としていて非の打ち様がない様な説である。Harris によれば、第3活用メタフォニーは幹母音の $\bar{i}$ ($>i$)によって起こると(イ)で述べているが、果してヨッドでなく母音 $\bar{i}$ (・)に起因するメタフォニーが他に沢山あるか否かを調べてみよう。Dámaso Alonso, *Obras Completas* (1972, Madrid)によれば、 $\bar{E}$ ・ $\bar{O}$ がヨッド(時には $\bar{i}$)の影響を受けた時、言語によって多様な変化を見せるという。 $\bar{H}ER\bar{i}$ がの例であるが、古ポルトガル語では *eire eiri* となり、スペイン語では *ayer* となり、カタロニア語では *ahir* となり、古プロヴァンス語では *er ier* となり、現代プロヴァンス語では *ier, jei, yei, ye, ierc aierc* etc. となり、フランス語では *hier* となっている。これらの例を見て分る事は、スペイン語は明らかに $\bar{i}$ の影響を受けているという事である。他の言語に比して $\bar{E}$ が二重母音化しないという事である。だから、この点に関しては Harris の説は正しいかの如く見える。しかし、このメタフォニーは「具体的な」 $\bar{i}$ という母音の影響を受けたものである事に留意しなければならない。Harris の言う $\bar{i}$ という母音は、第3活用動詞には具体的に現われるが活用の時には決して現われない(だから、削除という変な技巧を考案する必要がある)ところの抽象的な(と Harris 自身が言っている) $\bar{i}$ によるメタフォニーだという事である。ところで、スペイン語とカタロニア語の *a* は AD に由来しているのであるが、カタロニア語の *-hir* が注目に価する。即ち、 $e > \bar{e} > i, \bar{o} > \bar{u}$ という風に2段階も上に移行している事である。これが、Harris が(イ)で第3活用メタフォニーと関連づけて述べている事と同じ2段階移行なのである。その他に、カタロニア語には *fulla* < FOLIA ($>$ スペイン語 *hoja*)の2段階移行の例がある。この2段階移行は、Harris によれば、第3活用メタフォニーでなければ起こらないはずの現象なのが、カタロニア語では名詞に起っている。こういう所からしても、第3活用メタフォニーなるものの存在は増々疑わしいものとなってくる。

ここでスペイン語の第3活用動詞の不定詞に価するラテン語の不定詞の形を調べてみよう。その目的は、2段階移行か1段階移行かなどを調べる為である。そして、Harris の第3活用メタフォニー説を批判する為でもある。所属する動詞の選定に当って Real Academia Española *Esbozo de una Nueva Gramática de la Lengua Española* (1973, Madrid)を使用した。尚、接頭辞を冠する事によって語彙は増加するが、同一語幹のものは無作為に1つを選んだ。その様にしてみると、*-e+ir* の形をした不定詞は次の23ヶとなる。ローマ数字は Martín Alonso, *Enciclopedia del Idioma* (1968, Madrid) による初出世紀である。右端の大文字はその左に記したラテン語の直説法現在1人移単数の活用語尾などを特に取り出して記したものである。

<i>servir</i>	SERVIRE	XII	SĒRVIO	—IO
<i>concebir</i>	CONCIPERE	XIII	CONCĪPIO	—IO
<i>medir</i>	METIRI	XIV	MĒTIOR	—IO—

pedir	PETERE	XII	PĒTO	— 0
elegir	ELIGERE	XIII	ELIGO	— G O
regir	REGERE	XV	RĒGO	— G O
seguir	SEQUI	XIII	SĒQUOR	— U O —
gemir	GEMERE	XIV	GĒMO	— 0
henchir	IMPLERE	XII	ĪMPLEO	— I 0
rendir	REDDERE	XIII	RĒDDO	— 0
ce-ir	CINGERE	XIII	CĪNGO	— G O
constre-ir	CONSTRINGERE	XIII	CONSTRĪNGO	— G O
heñir	FINGERE	XVII	FĪNGO	— G O
reñir	RINGI	Z XIII	RĪNGOR	— G O —
teñir	TINGERE	XIV	TĪNGO	— G O
vestir	VESTIRE	XII	VĒSTIO	— I 0
embestir	INVESTIRE	XVI	INVĒSTIO	— I 0
derretir	DETERERE	XIV	DETĒRO	— 0
competir	COMPETERE	XV	COMPĒTO	— 0
desleír	DELERE	XVI	DĒLEO	— I 0 —
engreírse	INGREDI	XIII	INGRĒDIOR	— I 0
freír	FRIGERE	XIV	FRĪGO	— G O
reín	RIDERE	XIII	RĪDEO	— I 0

これら23ケの内には、実に4種類の語根母音が含まれているのである。それらの内訳は、-Ī- が2, -Ī- が8, -Ē- が2, -Ē- が11である。-I- の場合も -E- の場合もいずれも、短い即ち開いた母音の方が多い事に気づく。これら23ケの動詞のうち活用語尾にヨッド（その表記は -I- の場合も -E- の場合もある。Uの表記のワウは1つしかないので、便宜上ここに含める。）を従えていると一般に言われている動詞は半数以下の9ケしかない。即ち、23ケの動詞のうち、半数以上の14ケが直説法現在1人称単数にヨッドを含んでいないという事になる。動詞の使用頻度・初出年代も関係あるかも知れないが、今はひとまずヨッドの後続の有無のみについて議論すると、Harrisと異りヨッドの影響説を主張する私でも、もし23ケの動詞のうち半数以上の14の動詞にヨッドが含まれていないのでは、ヨッドの影響を主張するわけにはいかない。しかし、本当に残りの14ケの動詞にはヨッドは全然含まれてはいないのだろうか。繰り返し述べて来た様に、-I-又は-E-で表記され誰もがヨッドと認めるものを含んでいる動詞は9ケである。実はその他に、私がヨッドであり得ると考える音を含む動詞は8ケあるのである。9と8で合計17である。23のうち17という事は3/4以上という事である。全体の3/4以上を占める「一般的傾向」の影響を受けない例は、個人主義的傾向の末だ生まれてない16世紀以前の中世においては、極めて稀だと考えねばならない。それでは、残り8ケのヨッドとは一体何か。まず初めに、上のリストの中から現代語では-eñirの形をした5ケの動詞を挙げねばならない。それらに対するラテン語の元の形は-NGEREである。ラテン語の直説法現在1人称単数は -INGO で、それがスペイン語では-iño-

となっている。*-ī-*にはアクセントがあるから無条件下では当然規則変化をして、スペイン語では *-e-* となるはずである。それが更に1段階上に引き上げられるというのは、ヨッドの役目以外にはないのである。そのヨッドとは、今度の場合 *-G-* で表記されていたものに由来すると考えねばならない。その想像もつかない *-G-* がいかなる過程を経てヨッドとなったかについて少し述べてみよう。R. Menéndez Pidal, *Orígenes del Español* (1968, Madrid) によれば *-ng-* が *-ñ-* の音を表す為に使われているが例が11世紀末に早くも現われているという。又、M. K. Pope, *From Latin to Modern French with special consideration of Anglo-Norman* (1934, London) によると、フランス語でも11世紀までには *-g-* が *-n-* や *-l-* と連続して口蓋化音を作る役割をしているという。又、現代イタリア語で *-gl-* という複文字が *-l-* の口蓋化音を表しているのなども、*-g-* が内破音として作用した事実を偲ばせる絶好の材料である。現代スペイン語の場合は、イタリア語の *-gl-* という連続順序と異り、*-lg-* であり *-ng-* であるが、中世初期にはそれらとは逆の順序、即ち、現代イタリア語やフランス語と同じ順序の *-gl-* や *-gn-* という書き方も同様に頻繁であったのである。この順序の時の *-g-* がヨッドと化し *-l-* や *-n-* を口蓋化したと同じく、*-lg-* や *-ng-* の *-g-* がヨッドと化して先行する子音を口蓋化したであろうと想像はできる。しかし、この *-g-* が後続する場合は、*-g-* が先行する場合みたいに簡単には先行する子音を口蓋化したとも思われない。

さて、上で少し触れたのだが、私は前から *tengo* の *-g-* が以前はヨッドの音であったが為に、語根母音の *-e-* が *-ie-* という二重母音にならないのだと考えている。ポルトガル語が現在でも *tenho* であり、ガリシャ方言も口蓋化音を保っていて、元々のラテン語が *TENEO* でヨッドが現われているのだから、少なくとも初期のある時には *tengo* の *-g-* がヨッドの音を表していたと言える。では、いつ頃まで *-g-* がヨッドの音であったかという問題は、極めてむずかしい。しかし、Mateo Alemán の *Guzmán de Alfarache* には、現代語では *ponga* と言う可き所を *poña* と書いてある所からすれば、1597年には、*ponga* と書いてある場合もあるのかも知れないが、少なくとも *poner* の接続法現在1・3人称単数を *poña* と発音する人がいた事は事実である。そういう例があるからといって、全ての人称が *-ñ-* の音を含んでいたとは限らない。日本の老人の中には、乗合バスの事をバスと言い、百貨店の事をデバードという人が今日でさえ多いのだから、まして文盲率の高い昔の事である、まかり間違えば *[teña]* に対して *[ten - gamos]* と発音していたかも知れない。と言うのも、アクセントの位置が異なる事によって語感が変わるからである。又、上の場合は教養の度合いなどに寄る階級的・社会的方言差であるが、地方的方言差も考慮すれば当然種々の変種が見つかる事であろう。所で、私達は初級文法を教える際に「直説法現在1人称単数が *-go-* で終るもの」という風に一括して扱っているのであるが、忽論、現代語の教授に際してはそれぞれ全く問題は無いのであるが、歴史的な話しになると、そうは簡単にいかないのである。現代スペイン語で1人称の活用語尾が *-go* の動詞は次の11ヶである。(現代スペイン語直説法現在1人称単数、不定詞、それらに対応するラテン語の直説法現在

1 人称単数, 不定詞を順に記す。)

digo	decir	DĪCO	DICERE
hago	hacer	FACIO	FACERE
caigo	caer	CADO	CADERE
pongo	poner	PŌNO	PONERE
traigo	traer	TRAHO	TRAHERE
tengo	tener	TENEO	TENERE
vengo	venir	VENIO	VENIRE
salgo	salir	SALIO	SALIRE
valgo	valer	VALEO	VALERE
oigo	air	AUDIO	AUDIRE
asgo	asir	_____	_____

asir は ANSA (柄) という名詞に由来するから, 当然ラテン語の不定詞は無い。これら11ヶの他に, Federico Hanssen, Gramática Histórica de la Lengua Castellana (1966, Paris) によると, 古語では更に, tango (tañes ...), cingo (ciñes ...), plango (plañes ...), constringo (constrñes ...) の5ヶがあるという。これらに対応するラテン語の形はそれぞれ, TANGO, CĪNGO, PLANGO, CONSTRĪNGO で, 現代語が -ngo であると全く同様に-NGOという活用語尾を有している。そして, 2 人称単数以降は-NGES > -ñesという風になっている事からして -G- は明らかにヨッドの役割りを果たしたと言わねばならない。そのヨッドと化した -G- が, 先行する -N- を口蓋音にしたのである。更に, CINGO, CONSTRINGO の語根母音は短く開いた母音であるから, 活用語尾にヨッドが含まれていなければスペイン語の段階では当然 -e- となる可きなのに, -i- のままなのは -G- がヨッドと化した為としか考えられない。それはそうとして, どの様にしてヨッドが生まれたのであろうか。これはやはり文盲率の高い中世初期に -ng- が -gn- と同様に -ñ- の音を表わす事ができた事と一番関係があると考えられる。-gn- という順序の時は, 繰り返し述べる様に, 内破の位置にある為に容易にヨッドと化した。それを逆の順序で書いてある場合もヨッドの音を表す事ができた事からの類推又は混同によるところが大である。又, Menéndez Pidel, Orígenes del Español によると, -o- の前でも -g- は -y- の音を表す事ができたとあるから, tango, cingo, plango, constringo などは中世初期には, 例えば [tango] とも [taño] とも発音されていたと考えられる。そして, -ngo- と -ño- の差は, 我々日本人が日本語の sa ji su se so, ta tji tsu te to などを同行の音であるとして発音しても別に不自然に感じないと同じ程度の事が, スペイン語の動詞活用にも起っているのだと思えば納得のいく話しではなかろうか。更に又, 後段で引用する Yakov Malkiel の説であるが, p n ɣ が極めて相似かよった子音である事も, p ↔ (n) ↔ ɣ の変化に拍車をかけているとも言える。

今まで扱って来た tango (<TANGO)の類は元々ラテン語には -G- があってそれが消滅した例で, 同じ部類に属す現代語の動詞には, atañer (<TANGERE), astringir (<ASTRINERE), cñair

(＜PLANGERE) *restringir* (＜RESTRINGERE) etc. がある。

今度は、元々のラテン語に *-G-* という発音そのものがないのにスペイン語では *-g-* という文字及びその発音が現われている例に移ろう。それが実は、上に挙げた *digo* 以下の11ケの動詞なのである。それらのうち、 *digo* は元のラテン語が *DICO* で *-C-* が母音間にあり、しかも *-O* の前に位置しているので、そのままの調音点を保ち乍ら有声化した結果なのである。これは誰にでも納得される一般に行われている説明である。

ここで、Robert K. Spaulding. *How Spanish Grew* (1965, Berkeley) を引用しよう。“The *g* of *tengo* < *teneo*; *pongo* < *pono*; *salgo* < *salio*; *vengo* < *venio* probably represents the imitation by these verbs of such Latin forms as *cingo*, *finigo*, *frango*, *jungo*, *pango*, *pingo*, *planto*, *tango*, and Old Spanish *digo* and *fago*.” とある。

この最後の *digo* については既述の如く何人にも異論は無いが、 *FACIO* が規則的に変化しておれば *fatfo* のはずであり、当然 *fago* という形を *Cid 1366* などに見出すと説明にこまるのであるが、この場合は *FACIO* の *-I-* が極めて早くから消失したが為に、 *DICO > digo* の場合と同じく母音間にあるという理由で、有声化したと説明せざるを得ない。時として、*-I-* が消滅すると同時に、このヨッドを支えている子音 *-C-* も削除される事があった。これが中世初期にしばしば不定詞が *fazer* でなく *far* や *fer* という形で現われる原因だと私は考える。

さて、上の Spaulding の説には私は大きな異論はない。ただ説明が不十分である事は否めない。即ち、 *caigo* , *traigo* の元の形にはヨッドなど全く含まれていないのに、何故 *-ig-* が挿入されているのかという事に答えなければいけないのである。私は、言語変化の原因は必ずしも1つではなく、むしろ複数の要因が作用するのが通常だと考えている者である。この *caigo* と *traigo* の場合少くとも2つの inter-linguistic な原因があると思う。1つは Spaulding が *tengo* などの場合に言っている類推の作用である。別の1つは、音節境界を明確にしようとする作用が働いたものと考えられるのである。その作用は、いつの時代でもどの地方でも見られるものである。例えば、Juan de Veldés は *Diálogo de la Lengua* で、 *huevo* , *huerto* , *hueso* などの代りに一般大衆は *güevo* , *güerto* , *güesso* と言うと言った事実や、中南米の方言でよく *bueno* を *güeno* と言ったり *sea* を *seja* と言ったりするのは、音節境界を明確にする為にほかならない。しかし乍ら、*-ig-* が当初から〔*-ig-*〕と発音されていたとは考えられない。今日カタロニア語やガリシヤ方言で実際に行われているやり方であるが、*-ig-* の連鎖でヨッドを表わしていたものであるが、いつの間にか今日の様に〔*ig*〕と発音される様になったと考えられるのである。 *Cid 339, 2415* には *cayo* という形が、 *Cid 2144* には *trayo* という形がある。これらは全て、*-ig-* がヨッドの音であることを示すものである。尚、ポルトガル語でもガリシヤ方言でも *caio* , (a) *traio* と言うから、ヨッドの音が早くから導入された事が判る。

次は *asir* であるが、これに *-g-* が挿入されているのは何故だろうか。ゲルマン語の名詞に由来するこの動詞の不規則性は幹子音の *S* の調音点に一番の関係があると思われる。即ち、スペ

イン語のSの調音点は英語のSの場合より高く、日本語の si の場合の様に高いから、aso は発音の点で aŝo と混同され得たであろう。aŝo は今度は asgo と書かれる可能性があったので、それがいつの間にか [asgo] と発音されたのだと解釈される。

同じ様な現象は oigo <AUDIO (>ガリシャ方言 oio) にも起っている。AU- が o- になるのは別に不規則な変化ではないから問題ではない。問題は -DIO の俗語的発音である。多分、[-ŽO] 又は [-[̂]ŽO] であったろう。[-ŽO] 又は [-[̂]ŽO] は -gio の方が歴史的には本家なのだから、-gio と極めて近い関係にある -igo が [-ŽO] 又は [-[̂]ŽO] を表わしても別におかしくない。否、当然でさえある。その摩擦音又は破擦音の名残りは、oyen oyes oye に文字上ははっきり認める事ができる。(Berceo には、1人称単数の oyo という例がある。)

pongo <PONO (>ポルトガル語 ponho, ガリシャ方言 poño) については、私は Spaulding と同じ意見で、類推の力で多数に従ったと考えている。

salgo (ポルトガル語 saio) と valgo (ポルトガル語 valho ガリシャ方言 vallo) の場合も、書記的には比較的后期における類推の力を認めざるを得ない。Cid 3461に salgamos という例があるが、valer の接続法現在の形は Cid の4 48,880,2277,2603に el Criador vos vala 又語順が逆になった例 si uos vala el Criador が1324,1442, 2081,2328,2330,2598,2798,3520などに、又 Berceo に至っても Milagros de Nuestra Señora 439に i Válasli, Sancta Maria! などに見られる様に -lg- という今日風の綴りはまだ見かけられない。この -lg- の定着するのは16世紀を待たねばならない。R. Menéndez Pidal の例の Orígenes del Español には、11世紀末に -lg- -gl- が -l- の口蓋化音を表わすとは記してあるが、(-)l- だけでも (-)l- の口蓋化音を表わす事ができた事は、Cid の冒頭の文句 Delos sos oios tan fuerte mientre lorando を想起すれば容易に納得いく事である。だから、Cid 3461の salgamos の発音が果して当時 [-lg-] であったのかどうか疑わしい。むしろ、-l- の口蓋化音であったと私は考えるのである。と言うのは、Cid 997,3689に ferir の接続法として firgades とあり1130には firades とある理由を解釈すると、書記上の装飾的役割とでも言おうか、実際の発音とは必ずしも一至しない、あるいは、実際の発音の数ある変種の一つをある時に用い、又別のある時には別の一種を用いた結果だろうと思われるのである。もっとひどい例を欲すのであれば、Berceo, Milagros de Nuestra Señora の174 175という連続した3ヶ所で、今日 se la という2つの代名詞で言う可き所を、gela jela iela と3様に書いているという例を提供する事ができる。この3様の綴りの第1音節目が同一の発音であったのか、3様の発音であったのかは判定できない。しかし反対に、valer の接続法に -lg- の綴りがなく -l- だけだとしても、これが口蓋音であった事には何の疑問も湧かないはずである。この様に考えてくると、直説法現在1人称単数が -go- で終る動詞が11ヶあると言ったが、元々 [-go-] と発音されていたはずの digo 及び hago の類と -g- が当初はヨッドの音を表わしていたに違いない残りの9ヶの類に分けることができる。この点をとらえて、-goで終る動詞も歴史的に見れば一様ではないと前に言ったのである。

さて、あとの類に属する9ケの動詞のうち、tengo と vengo の説明を未だ残しておいた。今までの -go に関する記述はいわば序論であって、tengo vengo の2動詞が肝心要なのである。これは現代ポルトガル語でも *tenho venho* と書いて -n- の口蓋化音を保っている事からして、古スペイン語でも同様に -n- の口蓋化音であった事には何人も異論はないはずである。Spaulding の言う通り、類推により -g- を加えたのであろうし、又、Yakov Malkiel が *New Problems in Romance Interfixation*, *Romance Philology* Vol. XVII (1974) で、

“We would also observe that the intercalation of /g/, viewed from the Latin angle, occurs either immediately after the nasal, as in *pongo*, or after the apparent loss of a speech segment (thematic vowel, “Ableitungsvokal”) traditionally spelled *e* or *i*, though we are free to contend that in Late Latin TENEO was pronounced /tenjo/ or /teŋjo/ and VENIO /venjo/ or /venjo/, in which case we might argue that the insertion of /g/ could, through an assimilatory process, have secondarily changed /j/ to /n/ or even to /ŋ/.”

と言っているが、この前段でも言及した説はなかなか捨てがたい。この tengo と vengo の元となるラテン語は TENEO VENIO で語根母音が短いのである。残りの9つの -go で終る動詞はこの意味においては全く性格を異しているのである。スペイン語では、ラテン語のアクセントのある短い -E- は -ie- という二重母音になるのが音韻上の規則変化である。それが2人称単数以降では忠実に守られて、tienes vienes ... となっているのであるが、1人称単数には -g- という本来のヨッドを継承した音がある為に、それがたとえ今日 [g] と発音されていようとも、二重母音になっていないのである。換言すれば、ヨッドが語根母音の -E- という開母音を1段階閉じたのである。

今まで長々と -go の動詞について述べて来たのは、-g- がヨッドの音を表わしていたものである事を印象づけ、更には、-eñir の形をした動詞の直説法現在1人称単数が現代語では例えば *ciño* の如く -n- の口蓋化音となっているわけがラテン語の -NG- に由来する事を言いたい為だったのである。ラテン語の幹子音 -G- がスペイン語ではヨッドとして働いていて、根母音と場合によっては更に幹子音にも影響を与えている事を言いたいのである。

これで8ケの内 -eñir 型の5ケが終ったが、あと3ケが残る。それらは ELIGO FRIGO REGO の3ケで、それぞれ現代スペイン語では *elijo frío río* である。繰り返し述べている様に、R. Menéndez Pidal の *Orígenes del Español* によれば、-go- という綴字が -yo- という音を表わす事があったという。今の場合、すぐ上の -ngo とは条件が少し異なるが、-g- がヨッドの役割を果し得た事は、*elijo* (<*elizo*) の例を見れば明瞭である。

これで8ケの一見ヨッドを含んでいないと思える動詞には全てヨッドが活用語尾に含まれる事になる。そして、明らかにヨッドを含んでいる9ケの動詞とで23ケのうち17ケの動詞がヨッドを含んでいる事になる。そして、更に、この活用語尾に含まれるヨッドが語根母音の -e- を -i- にしている事になるのである。この段階になると語根母音が -Ī -Ī̄ -Ē -Ē̄ のどれであっても問

題にならないのである。

私が Harris の見事な説明に疑問を抱く様になった理由は2つある。1つは、上に私がヨッドの影響でその語根母音が2重母音化しない *vengo* (*venir*)に Harris の言う第3活用メタフォニーが起ったのであれば、その活用形及び不定詞は *vingo* (*vinir*) のはずなのに、事實は *vengo* (*venir*)であるという事、第2に、私の挙げた23ケのスペイン語第3活用動詞のうち、Harris の考え方をすればその主流になるはずのラテン語の第4活用(*-IRE*)動詞が、*INVESTIRE* *SERVIRE* *VESTIRE* の3ケしかない事である。ラテン語を公用語としたローマ変国に三頭政治という有名な歴史はあるが、これらのあまり頻度の高くない動詞が他の20ケの動詞の規準となれるはずがない。そして、一般の話者にとって、不定詞の幹母音という抽象的なものを活用動詞の語根母音に作用させる様な頭悩的な事が可能なのではないのである。人称による活用形は、不定詞とは別に考えねばならないのである。

所で、Harris は「異化」という項目をつけて、更に論を進めている。例の如く要約してみよう。
(d)で示した型の語形変化は、古スペイン語の初期に(e)で示す語形変化によって代られた。

(フ)	Present indicative		Present subjunctive (no change)	
	<i>mido</i>	<i>medimos</i>	<i>mida</i>	<i>midamos</i>
	<i>mides</i>	<i>medides</i>	<i>midas</i>	<i>midades</i>
	<i>mide</i>	<i>miden</i>	<i>mida</i>	<i>midan</i>

Malkiel をはじめとして多くの学者は、*medes mede meden*などの直説法で語根母音にアクセントのある形が *mides mide miden*になった現由は、*mido*という第1人称単数の語根母音である高母音(即ち *-i-*)の類推による拡大であり、これは全ての接続法の活用形の語根に高母音が存在する事によって支持されるのであるという意見である。(d)における全ての高母音は *Phonetic Metaphony*で説明されるのであるが、(e)を直接継承している(f)の高母音は *Phonetic Metaphony*では説明できない。これは、(i)や(ii)で見て来た通り、*mides mide miden* が(歴史的にも通時的にも)由来する元の形にはヨッドがないという事実に帰因するのである。そこで、類推によるメタフォニー(*Analogical Metaphony*)という補助が必要になる。その類推によるメタフォニーを公式化すると(g)の通りである。

(g)	<i>Analogical Metaphony</i>	
	(e, o)→(i, u)/ [+ stress] in 3rd conjugation verbs	

(f)に示した形の派生は、(g)に示す過程をたどることになる。

(カ) Indicative

Subjunctive

med + i + o	med + i + (s/n)	med + i + mos	med + i + a + (s/n)	
med ↓ y o	-	-	med ↓ y a	Loss of syllabicity
↓			↓	
mid y o -	-	-	mid y a	Phonetic Metaphony (4)
mid ↓ o	-	-	mid ↓ a	Theme vowel deletion
	mid	-		Analogical Metaphony (14)
<i>mīdo</i>	<i>mīde(s/n)</i>	<i>mēdimos</i>	<i>mīda</i>	Other rules

共時的派生は、特に次の様な特徴を有している：

(i) 直説法現在 1 人称単数 *mido* 及び全ての接続法における高母音は、(イ)の Phonetic Metaphony による。

(ii) *mides mide miden* における高母音は、(イ)とは別のメタフォニーの規則である Analogical Metaphony による。

もちろん、(カ)が(ク)の活用を生成さす唯一の方法でも、最良の方法でもない。言葉を初めて習う子供が(ク)の資料に初めて接した時、2つのメタフォニーの規則が作用しているなどとは考えもつかない。その様な学習者は、1つの規則が問題となる全ての高母音に適応可能であるという本人にとってより都合の良い文法を構築するであろう。この1つの規則というのが当然の事乍ら、第3活用メタフォニーなのである。(II)の規則は、しかし乍ら、一般的なものだったので、*medimos* と *medides* の語根における中母音の代りに高母音を不正確に派生させている。正しい形は、(II)の一般性を減じる事なく、(ヨ)に示す異化という単純な規則を追加する事によって、派生され得る。

(ヨ) *Dissimilation* V → [-high] / — Coí

(ク)の活用形は、(タ)で示す様になる。

(タ) Indicative			Subjunctive		
med+i+o	med+i+(s/n)	med+i+mos	med+i+a	med+i+a+mos	
med ↓ i o	med ↓ i s/n	med ↓ i mos	med ↓ i a	med ↓ i a mos	Third Conj. Metaphony
↓			↓	↓	
mid o	-	-	mid a	mid a mos	Theme vowel deletion
		↓			Dissimilation (ヨ)
-	-	med i mos	-	-	
<i>mīdo</i>	<i>mīde(s/n)</i>	<i>mēdimos</i>	<i>mīda</i>	<i>mīdamos</i>	Other rules

簡単に要約すると、(㉔)の語形変化が(㉓)の語形変化にとって代られた原因の第1は、多分 mido の様な直説法現在1人称単数及び接続法の全ての形に現われる高母音が、直説法の残りのアクセントのある語根母音に類推的に広まったせいであろう。(㉒)の様な語形変化が一度設定されてしまうと、(㉔)と(㉓)の2つのメタフォニーに関する規則をとまなう文法は最良のものではなくなる。すると、高母音と中母音の分布は、今度は、第3活用メタフォニーという単一の一般的規則(㉑)に極端に簡単な異化規則(㉒)を付与する事によって得られると解釈できる。

後半の部分は省略したが、以上が Harris の「異化」に対する説明要旨である。ここで私は3つの理由をあげて Harris に反対である事を明らかにする。第1点は、既述の如く第3活用メタフォニーは私の考えでは存在しないのだから、根底から Harris の説には根拠がない事をまず明らかにしておかなければならない。第2に、(㉒)の類推によるメタフォニーについては私は積極的に反対はしないが、活用語尾の-Iによって根母音の -E- が -i- になる例は他にも FECI > hice などの如くあるから、これも私の言うヨッドによるメタフォニーの部類に入るし、類推によるメタフォニーについては積極的に賛成もできない。第3に、(㉔)の中で(㉒)の異化現象として挙げてあるのは、根本的にあやまりである第3活用メタフォニーで生じせしめた -i- を無理やり -e- に戻すための策で、自ら困り果てて考案した代物で、こんな複雑な(しかし、図式としては魅力のある)歴史的変化を一般の運用者が考えだせるはずがないからである。

言語の歴史的変遷は、それを解く方からすればむずかしいのであるが、それを引き起こす方からすれば、意識して変化を生ぜしめるのでは決してないから、極めて簡単なはずなのである。それをいたずらに公式を立て、複雑な図式を書きつらねる事によって、簡単なはずの問題より複雑にする事は、厳につつまなければいけない。

結論として、スペイン語の -e- を語根母音とする第3活用の不規則動詞がその語根母 -e- をアクセントのある位置で -i- に変えるのは、Harris の言う様な3活用メタフォニーのせいではなく、対応するラテン語の動詞の活用語尾に含まれるヨッドの影響であると言える。

BIBLIOGRAPHY

- Hugh E. Wilkinson, Vowel Alternation in the Spanish — IR Verbs, in Aoyama Ronshu (1977 Tokyo)
- Real Academia Española, Esbozo de una Nueva Gramática de la Lengua Española (1973 Madrid)
- Ramón Menéndez Pidal, Orígenes del Español (1968 Madrid)
- Martín Alonso, Enciclopedia del Idioma (1968 Madrid)
- James W. Harris, Diphthongization, Monophthongization, Metaphony revisited, in Diachronic Studies in Romance Linguistics (1975 The Hague)
- Dámaso Alonso, Obras Completas (1972 Madrid)
- M.K. Pope, From Latin to Modern French with special consideration of Anglo-Norman (1934 London)
- Ramón Menéndez Pidal, Cantar de Mio Cid (1964 Madrid)
- Juan de Valdés, Diálogo de la Lengua (1969 Madrid)
- Berceo, Milágrs de Nuestra Señora (1968 Madrid)
- Mateo Alemán, Guzmán de Alfarache (1968 Madrid)
- Federico Hanssen, Gramática Histórica de la Lengua Castellana (1966 Paris)
- Yakov Malkiel, New Problems in Romance Interfixation (I) in Romance Philology vol. XXVII 1974
- Robert K. Spaulding, How Spanish Grew (1965 Berkeley)